
涼宮ハルヒのS O S 団

OB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒのSOS団

【Nコード】

N0802P

【作者名】

OB

【あらすじ】

キヨンは再び別世界へ。犯罪組織がいくつも存在する街で目を覚ましたキヨンは古泉とともに元の世界に戻る方法を探していく。

第一話（前書き）

よろしくお願いします。

第一話

まあ慣れちゃいけないのは解ってるさ。

さて、俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は今鉄格子の中で手錠をはめられながら過ごしている。

さっきまで俺は自分の部屋にいたのだ、最高に落ち着く部屋に……。

「全く、困ったものですな僕も貴方も涼宮さんも」

鉄格子の外側にいる警察官の服を着た古泉一樹は相変わらずの爽やか極まりない笑顔を俺に見せつけやがる。

「なあ古泉、今度もお前か？」

「まさか、僕はもう充分ですよ」

鉄格子を施錠していた鍵を開けながら古泉は言う。

「涼宮さんに直接訊いたらいい事です、さあ行きましょうか」

古泉が差し出した手を俺は軽く振り払い、先を歩く姿に古泉はまたあの笑みを見せつける。

やれやれ、今度は誰が仕組んだ事やら。

「ハルヒは何処にいるか知ってるか？」

「さあ？」

殴ってやろうか、そう思いたくなる程爽やかな返事に俺は肩をすく

めた。

鉄格子がいくつもある部屋から出ていくところは海外を思わせる住宅街。

霧が視界を遮るが見えない訳ではない。

「さつさとハルヒに会って事情突き止めて帰るからな俺は」

「ええ、僕も同感です」

俺は古泉とともに街へと歩き出した。

今思えばそう簡単には思い通りにならない事だと解っていたはずだった……。

第二話

「僕は貴方が来る一週間前にこの世界にいました」

「何かわかったのか？」

嫌というほど爽やかさが漂う古泉一樹に俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は訊ねた。

「ここは犯罪組織が多く存在しているようです、何やら噂によれば涼宮さんはボスだそうで」

「キツイ冗談だな。勘弁してくれ」

俺はとにかく広場の各場所に設置されたベンチに腰掛け、古泉と休憩している。

目の前を通って行く高価なドレスを着飾った貴婦人がいれば、ゴミをあさるホームレスもいる広場。

ここはいつの時代だ？ ましてや誰が創った世界なんだ？

「誰がここでやれって言った！？」

俺の耳が一瞬雑音をかき消されたように静かになった。

そして再び雑音が耳に入ると、次は貴婦人方の叫び声と激しい銃激音。

「な、なんだ？」

「隣の組織がここの組織に宣戦布告のようですね」

古泉はベンチから立ち上がると首に下げているホイッスルのような物を口に咥え、高らかに鳴り響くなんともうるさい音が俺の耳を刺激する。

「おい、サツだ！！ 逃げるぞ！」

物騒な銃器を胸元に隠した怪しい連中は慌てて縦に長いリムジン車に乗り込むのが俺の視界に入った。

俺と古泉がいる広場のベンチから少し離れた出入り口には一人の太った男が空を見上げた形で倒れている。

それを乱暴に運んで行くこの街の警察官達。なんとも重そうである。地面には引きずった跡がきつちりと血で残っている。全く、生々しい。

気付けば古泉はその現場まで向かっていた。俺もゆっくり追うように古泉の所まで向かう。

「意外と近くにいるかもしれませんね」

「ハルヒか？」

「ええ」

古泉の手には血が付着した小さなバッジ。見覚えのある単語だ。

「……こんな世界でもこんなの創ってんのか？ あいつは」

そう、『SOS団』と刻まれていた。

「すぐに会えますよ取り引きに応じると思います、涼宮さんなら」

「多分な……」

俺にこのバッジを差し出そうとする古泉に俺は当然拒否をした。

大事な証拠だろうよ古泉。

笑顔の古泉に俺は無視する他何も無かった。

第二話（後書き）

よろしくお願いします。

第三話

「涼宮ハルヒ？」

俺（周りからはキョンと呼ばれている）は警察官の服装した古泉一樹と一緒に色んな輩が集まる酒場にいる。

怪しい賭け事から、ただ仕事疲れに飲みに来ている人までそれはそれはたくさん。

そして店主である白髭の男に聞き込みをしている古泉。

誰に対しても爽やか極まりない奴だ。そこがなんとなくム力つくが。店主は透明色のグラスを白い布で拭きながら少し間を空けて答えた。

「……ああ、SOS団のボスの女だよ」

「そうですか。それで何処に？」

これが見ず知らずの一般人だったら何も教えてくれなかっただろうな、古泉が警察官の姿でよかった。

怪訝そうな表情の店主だが答えない訳にはいかないだろう。

「街の入り口だ。悪いがいくら警察でも詳しい事は言えん、こっちにも事情があるからな」

古泉は感謝の言葉を残し俺と一緒に店の外へと出る。

「いいのかよ？」

「さあ、ですが情報はもらえたのですから先程よりはわかってきました」

「へえ、そうかい」

俺には全く理解できないな。

外はもう暗い。街を歩く住民は皆自分の家に引っ込んでいる。

物騒なんだから当然なんだろう。

俺が古泉より前に足を踏み出した時だった。

目の前にSOS団と刻まれているバッジを胸に付けた厳つい男が…

…五人。

その後ろには真っ黒な高級リムジン。

「何か？」

古泉は微笑みをつけて厳つい男に余裕の表情。

どんな相手でも笑顔だな古泉。

「ボスがあんたらに用がある、しかし警官と囚人……変なコンビだな、まあ乗れ」

マジかよ。

夏でもないのに汗が滲み出てくる。

俺は厳つい男達に押されながらリムジンへと入れられてしまう。

車内は広く俺は快適空間に少し驚いたが古泉はいつもと変わらない。

ホントむかつくぜ、古泉。

真っ白な座席に俺と古泉、そしてその前に座る厳つい男二人。

「ボスの女を探してるみたいじゃねえか」

サングラスをかけた厳つい男はこのメンバーの中で多分年長者と思われる。

大体四十代だと思いたいが、どうだろうか？

「涼宮ハルヒ、随分困った嬢ちゃんだ。そんな女を好きになったボスはおかしいぜ」

まあそうだろう。

ハルヒを好きになる男は大体変な奴だ。
俺の隣にいる古泉は、

「僕はおかしくないですよ？」

爽やかに微笑む。

充分おかしいぜ、古泉。

「毎晩毎晩飽きもしないよな、そんなにいいのか……あの女」

サングラスの男の隣に座っている三十代の凛々しい男は無表情のまま、

「よっぽどいいんだ。ほっとけ」

隣から何故だか血管が切れるような音がしたのだが気のせいだろうか？ うん、気のせいだろう。

横を覗くのはやめておこう。

ハルヒを好きになるロクでもないボスの顔を拝まないと。

「……」

厳つい男達の会話を黙って聞き流しながら何処へ連れて行かれるのかもわからない俺は車窓から真っ暗な街を眺めるしか無かった。

第四話

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は暗い路地裏を歩いている。その隣には警察官の服装をした古泉一樹。前と後ろには厳つい男五人。

俺たちの足音以外何も聞こえない静寂さと少しの恐怖感が背筋を冷やす。

「入れ」

路地裏の最奥に到着すると真っ赤なドアがあった。少し鉄分の臭いが鼻につくが俺は気にせず開けられたドアの向こうへと足を踏み入れた。

感想を手短に言うとは狭いな。真ん中の高級なソファーにはボスらしき人物が座っている。

俺はしっかりとその人物と目を合わせる。

「く……」

「狭いけど、ゆっくりしていつてよ」

「おや？」

古泉は見覚えのある顔だったのだろう。そりゃそうだ、俺だってある。

この世界はどうなってんだよ……。

「国木田あああ！？」

「何？ どうしたの？」

驚く事もしないこいつはそういう奴なんだ。

「黙れ！ ボスの前で失礼だろうが！！」

後ろにいた厳つい男に俺は頭を殴られてしまふ。痛いぜおっさん……。

それを落ち着いた表情で眺めている国木田。どうしたもんか、この世界。本物じゃないのがせめてもの救いだ。

「面白いね君、ところでその警察官は何用なの？」

「……」

微笑む表情のまま無言でいる古泉。何か言ってくれ。

「……ここは誰が創ったのでしょうか？ 涼宮さんではないですね、彼でもない、誰なのでしょうが？」

おいおい、国木田の質問に答えてないぞ。

何故か冷ややかな殺気が俺の背中を凍らせている。

「あなたを恨む気はないのですが」

「何？」

古泉は内ポケットへと手を入れ一歩右足を踏み込んだ。

古泉、何をするつもりだ？

「おい、古泉？」

俺が声をかけたと同時に横を通り過ぎた古泉はテーブルに足を乗せて国木田の額へとリボルバーの銃口を突き付けていた。

「涼宮ハルヒを解放してください。その代わり警察はこの組織がやってきた犯罪、取り引きも帳消しにし薬物の売買も目を瞑りましよう」

すごい取り引きだな。

古泉、そんなにハルヒの事が好きなのかよ。

銃口を目の前にしても表情を変えない国木田はしばらく間を空けて口を開く。

「……無理だよそんなの、彼女はそんな程度の取引じゃ釣り合わない」

そんな程度って国木田、ハルヒはそんな程度でいいと思うぞ？　ぜひそうしてもらいたい。

国木田はリボルバーを手で振り払うと立ち上がった。

「帰ってもらって」

何も動けなかった国木田の部下はすぐに俺とテーブルからゆっくり足を地面に下ろした古泉を外へと引っ張り出す。

「運が良かったな、機嫌が悪けりや殺されてたぜ特に警察官」

「ええ……そうですね」

冷めた表情で目を細めている古泉に厳つい男は後ずさる。足早にアジトへと戻って行った男に背を向け俺は古泉と並んで歩いた。

結局ハルヒの姿どころか声すら聞けないまま返されてしまったわけだが。

「どうする、古泉」

「SOS団と対立している組織があります。そこに貴方が入るんです、そして私は警察側で援助します」

いつもの微笑みに戻って困難な事を提案した古泉に俺は眉をひそめた。

「そんな簡単に入れるのか？ 命の保証なんて無いだろうが、もし失敗したらハルヒに会う前にあの世行きだぞ」

そうかもしれないね、と呟いた古泉。

俺は五歩進んで古泉が立ち止まった事に気付く。

後ろを振り返ると微笑んだまま古泉は顔を俯かせていた。

何を考えていたのか、俺はその時わからずにいたのだ。

あいつの行動はおかしいのだともっと早く気付けばよかったのだと。

続く。

第四話（後書き）

あまり面白くないかもしれませんがよろしく願います。

第五話

そういえば俺（周りからはキョンと呼ばれている）はなんで牢獄にいたのか気になるのだが、隣にいる警察官の姿をした古泉に訊くべきだろうか？

それを察したかのように古泉は微笑みながら、

「知らなくてもいい事だつてあるかもしれませんが」

訊いた俺が悪かったよ。

俺は今ボロいアパートの部屋にいる。

四階の部屋で家賃は日本円にして一万円。

安い分部屋はボロボロだ。ベッドは固いし脆い、それ以外キッチンもトイレもお風呂も全部共有。

「家賃はこちら側が払います」

そりゃそうだろう。

俺はこの世界に巻き込まれてるんだからな。

「警察署で色々と準備をしますのでその間貴方は休んでいてください」

「はいよ」

今にも壊れそうな木製のドアが閉じられ俺は一人となった。

さて、外に出ても物騒だ。となると本当にここで大人しく休んでいないといけない。

机に置かれたテレビに向かってリモコンの電源ボタンを押してみる

が反応は無し。

「……」

もういい。本当に何なんだ、この部屋といいこの世界といい俺は一体何処の世界にいるんだよ。

苛立ちが止まらない。今にも何かを壊したいのだが……。その時、ドアを叩く音が三回ほど聴こえた。

「はいはい、つて……」

俺はすぐにでもドアを閉めたいと思ったね。目を細めつつ俺は腕を組んで壁にもたれた。

「何用で？」

本当の世界ならまあ自宅に来てても嫌とは思わん。だが、

「やあ」

「SOS団のボスがわざわざお一人で来るんだから重要な話なんだろう？」

国木田、今俺は嫌だ。非常に困る。

マイペースに笑って俺がしかめたのを見ている。

「まあね警察官が来るとは思ってなくて、ちょっと遅れたけど話があるんだ。入っていい？」

「……手短にな」

小さいテーブルを挟んで俺は体重の重い奴が座れば簡単に折れるであろうイスに腰掛けた。

「彼女と会って何をするつもりなの？」

「何って話訊くだけに決まってるだろ、何も無ければそれで終わり俺らの事情を知っている奴をまた探す」

「そうなんだ、でも残念だけど彼女には会わせられない。ありがとう、キヨン君？」

「……馴れ馴れしく呼ぶな」

こいつは国木田の姿をしているだけで本物じゃない。まったく他人だ。

国木田が去っていくのを見届けた後、俺は大きく息を吐く。
涼宮ハルヒとそういう関係だというのなら、なんとも苛立つ。
どうなってるんだろうね……ホントに。

「俺は嫌いだな、この世界」

「嫌い……ですか？」

時刻ははっきりとは知らない、この部屋に時計なんて無いんだからな。

だが夕方であることは確かだ。

古泉は戻ってきたかと思えば物騒な武器が入った鞆を持っていた。国木田が来た事は言わないでおこう。

「頭がおかしくなってくる。お前は何にもならないのか？」

「ええ、なりそうですね。涼宮さんが近くにいると解れば我慢はできます」

訊いた俺が馬鹿だった。

「で、どうするんだこれから」

「SOS団を外部から崩していきましようか、貴方も手伝ってくださいね」

俺はまた大きく息を吐いて目を細めた。

「できる範囲でな、ハルヒに会って事件が解決したら嬉しい」

「ええ……そうですね」

続く。

第六話

「アベレージ？　なんだそれ、本当にそんな組織がいるのか？」

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は今にも崩れそうな木製のテーブルとイスの前にいる。

古泉によればアベレージという組織はかなりSOS団に恨みをもっているようで名前を聞いただけで暴れるという激しい組織だ。

そこに俺が入るなんて大丈夫なのか？　特に命は保証できるのか？

「ええ、何かあればこちらが何とかします」

余裕の表情で微笑む古泉の前には拳銃が積まれていた。

リボルバーがほとんどだろうか、古泉はそこから一挺を俺に差し出す。

「我々警察が携帯しているM37エアウエイトといわれる物です」

「俺がこんなの持ってて組織に疑われないのか？」

もう少し警察から離れた武器にしてくれ。

俺の注文に古泉は爽やか極まりない笑顔で今度は別のリボルバーを手取る。

「パイソンの6インチです」

「リボルバーが多いな」

他に拳銃は無いのか、とテーブルに積まれた銃器を漁る。

どれを見てもリボルバーばかりで俺は少々眉をひそめる。

「無いよりかはマシですよ」

それもそうだな。

俺は古泉が用意してくれたホルスターを腰に装着し、パイソンとやらをそこに入れる。

「弾はいくらでもこちらで用意しますので安心してください」

「そうならないように努力する」

古泉の笑顔を見無視して早速俺は本題に取りかかると思う。

それを察したかのように古泉は笑顔のまま状況とこれからの事を説明してくれた。

「SOS団の協力者をまず何とかしないとけません。貴方がSOS団を敵視しているという事をアベレージにアピールするには……消す、もしくは刑務所送り、でしょうか」

「刑務所送りにしたらどうなるんだ？」

古泉は目の前にあるリボルバーを手に取る。

その銃口は俺に向けられた。何の真似だ？

「犯罪組織に荷担する事は法令で禁止されています。刑務所に入っても銃殺刑ですね」

金属を叩く音だけが響く。

弾が入っていない、引き金を人差し指で押さえている古泉を俺は睨

んだ。

「今日、深夜に決行。どうやるかは貴方次第ですよ」

古泉が部屋から出て行くのと同時に俺は全身の力を抜いた。ハルヒと会うだけだというにこつも複雑になつていくとは、しかもどどん組織の中に俺は巻き込まれていく。

古泉が何とかして俺はただハルヒと話して終わる、それでいいはず。

「それでいいだろうが……」

誰もいない部屋で俺は呟いた。

このアパートの一階には自動販売機がある。

俺が何か飲み物を求め一階へ下りようとした時だ。

自然と足が止まり、三階と四階に繋がる階段に誰かが立っている。

「……長門か？」

顔はキツネのお面で隠れて見えない、黒いフードを被って髪も見えない。

だが、無というものを感じさせる雰囲気は長門のように思える。

「それは誰？ 私は周りから情報屋と呼ばれているそれ以外名前は無い」

声は長門そのものだ。

「あー、その情報屋が何用だ？」

俺が質問して五秒ほどが経つと情報屋は、

「涼宮ハルヒは今酒場にいる。会うのなら一人で行って……」

そう呟いて三階へ繋がる階段を足音も無く下りて行つた。

俺は急いで後を追いかけたが何処にも姿が見えず、まるで幻覚を見ていたかの様だ。

このアパートの外に出てみるが、あの情報屋はいない。

ここから見える公園の時計台は午後七時ちょうどを針が差している。古泉が来るまでにまだ時間はあるのだが、どうしようか？

いや、考えている暇はない。とにかくあいつの言つ事を信じてみよう。

俺は酒場へと続く平坦な道を走り出す。

続

第六話（後書き）

よろしくお願いします。

第七話

平坦な道を走って五分。俺（周りはキヨンと呼ぶ）は少々息を切らし、酒場の前にいる。

ここに涼宮ハルヒはいる。

あの情報屋が言っている事が確かだったらだが。

俺は扉の前で深呼吸、そして、手でゆっくり扉を押す。

「……ハルヒ」

いくつもある丸いテーブルと安物のイスが並ぶ店内の奥には全く違う高価なテーブルとイスがあった。

そこに座っているのは真つ赤な薔薇のようなドレスを着た……涼宮ハルヒ。

その前には先ほど俺に情報を与えたキツネ面の長門らしき人物。イスから立ち上がったハルヒ。

ドレスに切れ目があり、そこから見える細い脚線。

現実世界より長い艶のある髪、あの力チューシャはしていない。俺はどこを見ていいのかわからなかった。

そして、彼女は少女ではないと思えた。

俺より年上じゃないのか？ それほど彼女は、ハルヒは妖艶に見えたのだ。

「あんたが言っていた人ってアレの事？」

ハルヒの人差し指が俺に向けられる。

しかもアレ扱いとは……。前言撤回だな。俺はすぐにそこへ早歩きで向かうと、

「これからどうするか……それはあなた次第」

情報屋はその場から去ってしまった。

追いかけようかと思っただが、今はそれどころじゃない。

ハルヒの鋭い視線が俺を睨む。

その表情は俺を敵視しているかのようだ。

「……」

「それで、何用？ どうでもいい事だったらあんた殺すから」

物騒な言葉だ。

俺は息を吸って、

「ハルヒ、俺はこの世界の人間じゃない。頼むから元の世界に戻してくれ、それとこの世界を創ったのはお前なのか？ それとも誰か協力者がいるのか？」

ハルヒの肩を掴んで訊ねる姿に周りが騒ぎ始める。

「……あんた何者なの？」

真剣な眼差しが俺を捉える。

まるで何かを知っているようだ。

「頼む、教えてくれ」

ハルヒが何かを言おうとした瞬間だ。

店の外からそれを遮る銃声音。

俺は思わず後ろを振り返った。

扉が思い切り開けられたと思えば血まみれの男がやってきたではないか。

また抗争か？

「お嬢、逃げて下さい！ 警察が……！？」

その男の頭にリボルバーが突き付けられた。

「情報を与えたのは長門さんですね？」

「……古泉」

「古泉君！？ あっ」

言ってしまった、まるでそのような表情でハルヒは口を両手で押さえた。

怪しく微笑む古泉を俺は睨みつける。

「襲撃は深夜じゃなかったのか？」

「それはこっちのセリフですよ、涼宮さんと唯一話せる時間でしたのに」

それで深夜に襲撃するなんて計画したのか。

「前回もそうでしたが今回もまた長門さんに邪魔されるとは……思いませんでした」

血まみれの男の頭部から銃口が離され、古泉は俺の方まで歩いてくる。

「やっぱりあいつは長門か」

「ええ、それと時間はかなり違いますが計画は実行しますよ」

なんだって？ 今はそれどころじゃない。

ハルヒに事情を聞いてさっさと俺は元の世界に戻らないとダメだろ。

古泉が軽く右手を挙げると一斉に古泉と同じく警察の服を着た奴らが現れた。

「彼と涼宮さん以外ここにいる全て銃殺刑とします」

酒場の店長も数人に抑えられ、他の客人達も皆連行されていく。

「あとは、ここを爆破しますので避難しましょうか」

古泉は微笑む。俺はあいつの行動がおかしいと今更だが気付いた。ここにハルヒはいる。もうそれだけでいい。

こんな計画も必要ないはずだ。

なのに、古泉は何故こんな事をする？

「これが僕の仕事ですよ」

こいつは本当に現実世界の古泉なのか？

長門、ハルヒ、古泉……朝比奈さんはどこにいるのだろうか。彼女だけはまだ会っていない。

ハルヒの手を取り誘導する古泉。

「キョン」

「えっ？」

突然ハルヒの口から俺を呼ぶ声がした。

それを止めるかのように古泉はハルヒの腰に手を添え急がせる。

俺は肩をすくめて後を追う事にした。

いずれ分かる事だ。

何がどうなっているのか……が。

第八話

「おい、どういふ事だよ、古泉」

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は古泉に対して苛立っていた。

ハルヒから事情を聞かなければならないというのに、肝心のハルヒが来ないという。

「その代わりといつてはなんですが、アベレージのボスが貴方に会いたいそうです」

代わりになるわけないだろう。

「どうぞ」

古泉が古びたドアを開けてそのボスとやらを呼ぶ。

「失礼します」

俺は目を限界まで開く。

聞き覚えのある天使のような声。

その姿はまさに天使。

長い髪、いや全身からいい香りがした。

「朝比奈さん……？」

「はい？ 確かにそうですが、まだ自己紹介もしていないのに知っているんですか？」

「あ、ええまあ」

朝比奈さんが犯罪組織のボス？　どんな世界だよ。

「それでは僕はまだ用事があるので」

ハルヒをどうするつもりなんだ？　あいつは。

古泉がアパートの部屋から出て行って数分の沈黙があつた。
そして、

「キョン君」

「えっ？」

俺だってまだ自己紹介をしていない。
なのに何故俺のあだ名を知っている？

「ここは別世界という事は知っていますね。涼宮さんも長門さんも
古泉君も現実世界の人です」

「……だったら、誰がこの世界を創ったんですか？」

朝比奈さんは黙って首を横に振った。

知らないのだろう。俺は少々肩を落としたがSOS団が皆本物だ
という事だけでも安心だ。

しかし不思議だ。

「どうしてハルヒも長門もさっきもそうですけど朝比奈さんも初対
面みたいな発言を？」

「私の場合は古泉君にばれないようにしているだけです。涼宮さんと長門さんはわかりません」

そうだろうな。

俺は久しぶりの対面に心の底から喜びしばらく朝比奈さんと対談した。

「涼宮さん」

「何、古泉君？」

「彼の事が気になりますか？」

「そんな事……ないわよ」

「そうですね」

「当然……よ」

「キヨン君」

他愛の無い会話が終わりかけの時、突然朝比奈さんは真剣な表情を俺に見せた。

「古泉君とはあまり近くにいない方がいいと思います」

何をいきなり？ 確かに近頃のあいつは様子が変わだ。

昨日なんて酒場を火の海にさせた挙句そこにいた奴ら全員を銃殺刑にもした。

今日はハルヒにも会わせてくれない。

だが、あいつといたところこつちも困る。

古泉がいればハルヒもいる。

「どうしてですか？」

「……古泉君はおかしいです。この前も平気でSOS団の部下を銃殺したり、少しでも犯罪組織と関わりがある店を焼き払って経営者も皆死刑にされました」

「……」

言葉が出てこない。

「完全にSOS団のボスを孤立させるつもりです」

「国木田……はここの世界の人間ですね？」

「はい、とはいえませんが、多分そうだと思います」

自信のない声と返答は俺に不安を募らせる。

「時空が捻じれていますから、もしかしたら人格だって変わっているかもしれません」

「……」

こうして俺は朝比奈さんとの面談は終わった。

気付けば夕方。

俺はまだ帰ってこない古泉とハルヒをひたすら待っている。何をやっているんだか。

外へ出てみようか？　もしかしたら長門がいるかもしれん。僅かな期待を胸に俺はアパートから出て行く。

霧が薄暗く見事に街の景色をぼやけさせている。

外を歩いている奴なんてどこにもいない。

夕方になれば皆何処かの建物に隠れている。

俺だけがこの街にいるみたいだ。

この街の中央にある広場に行ってみても誰もいない。時計台の針は五時を回っている。

遠くに行っても物騒なだけだ。

帰ろうか、俺がそう思って後ろを振り返る。

「……」

キツネのお面を被った奴がそこにいた。
フードを頭から覆っている為髪も見えない。

「長門」

「違う」

「何が違うんだ？ お前は長門だ」

「……あなたがそう呼ぶのならそれでいい」

俺は肩をすくめた。

「ここで待つて、そうすれば涼宮ハルヒも古泉一樹も来る」

「本当か！？」

「ただ……」

ただ？ 俺は長門の返答を待った。

「あなたが耐えればの話」

「どういう事だ？ おい、長門！」

長門は霧に混じるように姿を消した。
再び一人となった俺は呆然と立ち尽くす。
本当に来るのだとしたらこれほど嬉しいことはない。
しかし、最後の耐えるとはなんだ？

「あの時のガキじゃねえか」

「そのようだな」

「!？」

俺に声をかけてきたのは黒スーツ姿の厳つい男と凜々しい男。こいつらは確かSOS団。国木田の部下じゃないか。

「あの警察官はいないようだな？」

「……ちょっと付き合え」

二人の力は半端なものじゃない。両脇を掴まれ俺はそのまま車の中へ乱暴に突っ込まれる。

「おいおい、何のつもりだよ!？」

「ボスがまたお呼びだ」

「国木田が？」

俺はまたあいつの所へ行くのか……。

続

第八話（後書き）

よろしくお願いします。

第九話

薄暗い地下で俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は上半身を裸にして両腕を縄で縛られていた。

吊るされた状態で全く身動きができない。

目の前には国木田とその部下五人。

「彼女はどこ？」

国木田は少し急いでいるような喋り方で俺に質問する。

「それは俺が知りたい、古泉がハルヒを連れて消えたんだよ」

「……彼女と君を見たって言う部下がいるし、簡単には信用できない」

国木田は部下の一人に指で合図のようなものを送っていた。

「あのな、好きでこの世界にいるわけじゃないぜ、はやくハルヒに事情を聞いて帰るそれだけだ」

「彼女が創ったこの世界は嫌いかな」

「今なんて言った、ハルヒがこの世界を創ったのか!？」

「僕が今知りたいのは彼女がどこにいるか、なんだけど」

部下の一人はいつの間にか持っていた水色のバケツを構え俺の目の前にやってきた。

おいおい、何するつもりだよ？

「ここの地下って昼夜関係なく結構寒いからね、ちょっと厳しいかな」

バケツが俺に向かって飛んでくる。

その中にはブロックアイスとそれにより冷えた水が。

まともに俺の肌へと降りかかる冷水と氷が一瞬にして体温を奪い、急激な寒気が俺を襲う。

「うおっ!!」

俺は思わず体を震わす。

「キミが答えない限り、終わらないからね」

国木田は目を細め、俺から遠ざかっていく。

「しらねえって……っ！」

俺の顎を思いっきり掴んできた蔵つい男。

「坊主、早く言わねえと助からないぞ」

「だから……知らないって!!」

問いに答えた瞬間、俺の顔が右に自然と向いていた。

口腔内で鉄分の味が広がる。

地面に俺の血が飛び散った。恐らく鼻血か、唇が切れた部分からの、だろう。

後々痛みがくる。

「かけろ」

蔵つい男が離れると、他の奴が冷水と氷が入ったバケツを持ってこっちに来た。

俺の顔から至近距離で降りかかる。

「!？」

息ができないほど苦しく、俺は思わず両手足を動かすが全く意味が無い。

氷の破片が俺の顔を傷つけ、先ほど殴られた痛みも麻痺している。ようやく俺は息ができるようになり、思いきり深呼吸を始めた。

「どうだ」

「ゲホッ、ゴホォ!! はあはあ……」

この世界にただ強制的に呼ばれて、周りに振り回されて、それでこの仕打ちだと？

あまりにも理不尽すぎる。

長門の言った通りこれに耐えればハルヒは来る。

本当にそうなのか？ 何故俺は長門を信じた？

長門が虚言しているだけかもしれないというに……俺は。

ああ、寒い。俺の体は完全に麻痺している。

むしろ熱く感じるのだが。

国木田……あいつは何かを知っている。

ハルヒがこの世界を創ったと、言っていた。

本当にそうだとしたら、とんだ茶番だ。

俺はその為にこんな事をされているのなら簡単にはあいつを許せない。

「なに黙り込んでいる」

蔵つい男はまた俺の顎を掴むと今度は下から拳が。

血液だけが飛び散る。

今の俺に痛みなんてない。

頭の中が空っぽになったような感覚が俺を襲っている。

「これ以上やつても意味がないな。おい、やれ」

「！？」

「どっちにしろ、この坊主が生きて帰れるわけがないんだからな」
殺されるのか？ 俺は。

嫌だぜ、こんな理不尽な死に方。

「すぐに殺すな、まずは足を狙え」

蔵つい男以外の部下四人はリボルバーを手に俺を狙っている。

「やれ」

地下に破裂音が響き渡り、

「！！？」

俺の足に麻痺を忘れるほどの強烈な痛みが広がった。

下半身の全てから力を失うほどだ。

「次は、肩だな」

蔵つい男の指令通り、次の部下が俺を捉える。

「やれ」

また同じように破裂音が響く。

「っう！！？」

何かが切れるような、弾けるような音が体内から聞こえた。

血液が俺の顔に付着。

上半身も同様力を失う。

俺を立たせているのは天井から両手を吊るす綱だけだ。

「腕」

敵つい男の冷めた声が耳に入ってくる。

必死に力を振り絞って顔を上げ、目の前にいる全員を睨む。

「やれ」

腕が千切れるんじゃないのか？ それぐらいの衝撃が右腕に伝わる。

そして、俺の体力がもう限界だ。

万歳をしている腕から流れてくる自身の血。

その血が俺の口へと入っていく。

ああ、もう。顔を上げる力も残っていない。

「頭」

死ぬのか？ 本当に。

ヤバいなんて思えない。

ただ、理不尽な死に方だ。

「……ホントに」

「ホントについて何が？」

女の声。

聞き慣れた声だ。

「！？」

「お嬢！？」

堂々と歩くような足音が耳に届く。

「その銃、今すぐ下におろして！」

俺の視界から見えたのは地面に落ちたりボルバー五挺。

それ以降、何が起こったのか俺はわからない。

いつの間にか気を失っていたのだろう。

あの声は確かに涼宮ハルヒだった。

長門の言っていた事は本当だ。

信じてよかったのか、それとも元々ハルヒは俺の所に来るつもりだったのか。

もしそうなら部屋で呑気に待っていた方がよかったのか？

そんなわけないよな？ 長門、ハルヒ……。

続。

第十話

今、俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は何処かの部屋にいる。

ベッドで仰向けのまま蛍光灯だけがある天井を見上げた。

その視界の隅に見覚えのある少女。俺は少し右に首を動かす。

「ハルヒ？」

腕を前で組んでは俺を見下ろす赤いドレスを着た少女。そう、涼宮ハルヒがいた。

「ちゃんと生きてるわね、キヨン」

何かを企んでいるかのように喜ぶ声。

だが、表情は優しく微笑んでいた。

「ああ、俺生きてるんだな……」

ハルヒの手が俺の頬に当たると軽い痛みを感じ、生きている事を理解する。

「古泉は？」

「あんたが借りてるボロアパートにいるわよ」

「そうか……で、二人で何処に行ってたんだ？」

「何よ、あんた知りたいの？」

「当たり前だろ、そのせいで俺はこんな目に遭ったんだ」

ハルヒはベッドに座り俺から背を向ける。

「……教会よ」

「教会？」

結婚でもするのかよ、と一言呟くとハルヒは黙り込んだまま返答がない。

「ハルヒ？」

「そんなわけないでしょ。それよりさつさとその怪我治しなさい」
「そりゃそうだ。」

ハルヒはベッドから体を離し、立ち上がった。

「しばらく古泉くんとアパートにいるから、もし何かあったら有希に言って」

「は？」

「……」

ハルヒの後ろにはキツネのお面を被ったあの長門がいた。

俺は思わず体を起こさせる。

すると、雷のような衝撃が体中に響き渡り俺は思わず叫んでしま
う。

自分の体をよく見ると、ほとんど包帯で巻かれていることに気が
付く。

あんなに銃弾受けて生きてんだからすごいよな……俺。

ハルヒが帰ってからすぐに俺はドアの前で突っ立っている長門を
睨む。

「長門、お前があそこにいればハルヒに会えるって言うから待って
いたんだが、拷問されるとか聞いてないぞ」

「耐えた？」

「……耐えたとかじゃない、殺されるところだったんだ」

「SOS団に行かなければ涼宮ハルヒは来なかった」

「？」

どういう事なのか俺は睨むのをやめて自然体で長門の話を聞くこ
とにした。

「あのまま戻っていれば貴方は古泉一樹に殺されていた。涼宮ハル
ヒは貴方がSOS団に誘拐されたと思い貴方を救助」

「古泉が俺を？」

俺は頭を抱える。

巻き込んでいて、今度は俺を殺そうとしているのか。

ハルヒも古泉も何を企んでいるのやら。

「なあ、ハルヒがこの世界を創ったのは知ってたのか？」

「創造したのは確かに涼宮ハルヒ。だけど、実行犯は……」

そこまで言って長門は黙り込む。

重々しい沈黙が流れてから一分。

俺は声をかけようか、いや、まだ待つ、そう自問自答していた。

「……歩ける？」

ようやく口を開いたかと思えば全く関係のない事を。

「実行犯が誰なのかを話してくれるんじゃないかなかったのか？」

「SOS団、国木田が来る。あなたを殺しに」

おいおい、冗談じゃない。まだこんな状態で逃げれるわけないだろう。

立ちたいのだが力なんて入らない。

部屋の外側から聞こえてきた階段を上がるような足音。

どうやら部屋のすぐ外は階段があるようだ。

「逃げる場所なんてないぞ」

「……選んで」

「？」

長門は俺の前に寄ってくると、キツネのお面を外した。今まで少しは疑っていたが確かにこいつは長門だ。今、顔を見て確信を得た。

「一つ、貴方の代わりに私が国木田を殺す」

いきなり物騒な事を言う長門。

「二つ、ここに拳銃がある。これを使って貴方が殺す」

どっちにしる殺害の他ないだろうに。

「選んで」

銃の扱い方なんて知らないし、もし仮に国木田を殺してしまったら……。

朝比奈さんが言った通り時空の歪みで性格が変わっているだけの国木田だったら、もう取り返しのかないことになる。

俺自身でどうにかできるのか？ 怪我だらけで動くのも難しい。

いや、国木田を生存させる確率があるのは……。

「俺がやる」

「……」

長門は返答を聞いた瞬間その場から消えてしまった。
拳銃を残して……。

とつとつドアが開かれる。

「やあ、キヨン」

日常会話をする時と変わらない表情で国木田は俺を見た。

その手には明らかに拳銃があつた。

そして、俺の手にも拳銃。

「君から彼女の居場所を聞いたって意味無いからね、だからこうやって殺しにきたんだ」

「……」

ヤバイ、呼吸ができない。震えているのが一目でわかる。

「この世界とそろそろさよならしようか？」

国木田が俺の傍に寄ってくる。

銃口が額に触られた時、少々の熱さが伝わってきた。

拷問された時以上に鼓動が速く波打つ。この恐怖感もそうだ。

ハルヒ、長門、朝比奈さん、なんで俺はこんな目に遭うんだ？

古泉、お前の今までやってきた事は何なんだ。俺を殺してまでハルヒが欲しいのか？

絶対突き止めるまで死ねるわけがない。

例え目の前の全てが本物であろうと偽物であろう関係無い。

もう……。

「うおおおお！！」

俺は叫んだ。

引き金を思いっきり人差し指で押し込むと耳障りな破裂音が部屋中に響き渡った。

「！？」

ほぼ同時に破裂音が重なる。

左側の頭部に強烈な揺れと電撃が走る。

思わず俺はベッドに倒れ込んでしまう。

「くそっ」

頭を抱えながら今の状況をすっかり視界に映す。

目の前に国木田はいなかった。

力を振り絞ってもう一度上半身を起こすと、勝手に視界は床の方を映した。

そこにはお腹を両手で押さえつけてうずくまっている国木田の姿。どうやら生きているようだ。安心感で力が抜けそうになる。

「国木田、しばらくそうやって頭冷やしてろ。他の奴らと一緒に元の世界に帰らないといけないしな」

あー、頭がおかしくなる。

いくら掠ったとはいえ痛い事に変わらない。

「ハルヒと、古泉の所に行くか……」

壁に手を当てゆっくりと部屋から出ると次は階段。ため息が出る。

「今銃声音が……」

ふと、外から声が聞こえてきた。

「馬鹿、マフィア同士の抗争に決まってるだろう！ 危ないから近づくな」

何やら制止するような声も。

俺は一段ずつお尻からおろしていく。

その間も二人の声は聞こえる。

半分以上まで到達すると、ようやくその二人の足が見えてきた。

「やっぱり怪我人がいる」

「こら！」

聞いた事のある声だ。ハルヒに似ている。

もう一人はまあただのおっさんだろうな。

階段の近くまで寄って来た一人の少女が見えた。

「……ハルヒ？」

なんという事だ。ハルヒにそっくりな少女が目の前に。

ロングストレートの茶髪。強気な表情。整った綺麗な顔立ち。ワンスピース姿。

「先生、この人マフィアっぽくない多分この市民よ。助けてあげてよ」

「本当か？」

疑いながらも近づいてくる髭面のおっさん。

白衣を着ているところを見るとどうやら医者のようなのだ。

「怪我だらけじゃないか、すぐに病院へ行こう」

医者に担がれ俺は二人が乗っていたと思われる一台の車に運ばれた。

「君、名前は？」

本名を名乗ると一枚の紙に記入しているのを伺える。

「た、助かった……」

安堵の表情を浮かべる俺。

「キヨン」

「は？」

「なんかキツネのお面被った変な子が誰かと喋ってるのを盗み聞きしたのよ。キヨンってあなたの事？」

「……まあ周りからそう呼ばれている」

少女は俺の体を上から下へ下から上へと何回も繰り返し目を動かしている。

「えっと、名前は？」

「アタシはハルヒよ、よろしくね」

「ああ……よろしく」

単なる偶然か？ それとも、まさか……な。
続く。

第十一話

全てがおかしいと思え、俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は笑えてきた。

街から少し離れた村に運ばれてから一週間。

医者の手をしている……ハルヒという少女。そして、街にいる本物の涼宮ハルヒ。

俺は今杖を手にして村の周りを歩いている。

両足を撃たれたせいでうまく動かすのが少々難しい。

いつも霧で覆われている街とは違って、青空が向こうまで広がっているのを確認できる。

特に目立った建物も無ければ、人通りも少ないこの村でこの先どうするべきかを考えていた。

まずこの怪我を治さなければまた国木田達に狙われ殺されてしまうのは当然だ。

あいつは本気で俺を消すつもりだろう、そして古泉も隙あらば俺をこの世界から消そうとしている。

まったく、この世界もこの住民も創造主もおかしい。

「何一人で笑っているのよ？」

白衣の姿で腕を組む少女、ハルヒはなんとも面白そうに笑みを浮かべて現れた。

強気な性格だというのが人目で分かるほど表情に出ている。

なんとも艶やかな長い茶髪、整った綺麗な顔立ち。

迫られたら一気にその魅力に落ちてしまいそうだ。

「ちょっと考え事をしていたんだ」

「ふーん、頑張ってるハビリをしたり考えたりするのはいいけどさ、外へ出歩くのは危険だから気をつけた方がいいんじゃない？」

俺の状態と今の状況を知った上なのだろうか、真剣な眼差しで忠告するハルヒ。

「とりあえず診療所に戻りなよ」

「……そうする。これ以上死ぬ思いをしたくないしな」

俺の隣に並ぶとハルヒは、

「怪我人だから」

腰に手を添え一緒に歩いてくれるようだ。

「そりやどうも」

近づくと花のようないい香りがした。

意識をしていないつもりだが、どうも胸の鼓動が自然と速くなる。

俺とは違って彼女はなんとも思っていないだろうな。

性別関係なく何人もの患者を診てきたんだから、慣れているだろう。

「まだ考えてるの？」

「これからのことを考え中だよ」

「怪我を治すことだけに集中しなさいよ」

「へいへい……」

診療所に戻ると俺は病室のベッドに腰を下ろし思いっきり深く息を吐く。

「男が疲れた顔をしない、アタシはしばらく受付口にいるから何かあったら呼んで」

「はいはい、どうも」

病室から出て行くハルヒを俺は少しだが名残惜しく見送る。

ここの世界のハルヒだというのは分かったが、こっちの方が落ち着いている。

大人びているというか、冷静というか。

だが、容姿はハルヒそのものだ。

「はあ」

ベッドで仰向け状態になって真っ白な天井を見上げる。

この世界を創造したハルヒともう一人の犯人とは誰なのだろうか。そもそもハルヒは自分に能力があることを自覚していないはずだ。今一番ハルヒに近いのは古泉だ、というよりあいつしかいなんじ

やないのか？

長門は黙り込んで消えちまったし、この前同様実は古泉が長門を演じているのかもれない。

「……？」

病室の窓が小刻みに振動する音が耳に入った。

地震か？ 今にもガラスに亀裂が入りそうだ。

それを確認する為、俺が体を起こして杖に手を伸ばそうとしたときだ。

「みいつけたああああ！！」

「はああ！？」

窓ガラスが突然勢いよく弾け、破片が飛び散る。

割れる音よりも耳障りな大声が鼓膜を壊すのではないかと思えるほどで、俺は驚愕する。

襟首を掴んできたそいつは迷彩服姿で真っ黒な覆面を被っている。

「キヨン！？」

急いで駆けつけてきたハルヒ。

「ハルヒ、ナイスタイミングウー！！」

「怪我人に何するつもりよ！」

襟首から手が離れ俺はそのままベッドへ倒れる。

「イテッ」

せっかく体を起こしたというのに……。

「こ、コノオ！」

どうもこいつは怯えているように見える。

ナイフを取り出してハルヒに襲い掛かろうとしているのに弱腰だ。しかし、ナイフは危険だ。なんとか立ち上がるうとするが体はちゃんと反応してくれない。

「は、ハルヒ、危ないぞ！」

「……」

しかし、ハルヒは黙って相手を見ている。

おいおい、逃げないのか？

「ハルヒ！」

ナイフがあと数センチで刺さるところでハルヒは軽やかに横へ回避。

「あれ？ おおう！？」

ハルヒの出した片足に引つかかるとナイフは手から離れ相手は一瞬空中に浮く。

相手の頭に手の平を乗せたハルヒは容赦なく床に叩き落す。

あれは痛いどころじゃ済まないだろう。

「あんた誰？」

覆面を強引に脱がすとハルヒは首を傾げて、気絶している相手を見下ろす。

だが、俺はすぐに分かった。

「谷口！？」

まさか谷口もこの世界にいたとは……。

しかしなんでまた迷彩服なんか着ているのか。

「あんたの知り合いなの？」

「まあ一応な」

「とりあえず事情は説明してもらわないと」

ハルヒは何を思ったか谷口の顔に蹴りを、それも痛い痛い。

「うっ……」

目を覚ました谷口は、俺とハルヒを交互に見上げている。

「谷口、だよな？」

「あ、ああ。そうだよ」

床に座り込んで不機嫌な様子の谷口。

「俺を覚えて……ないよな」

「？」

谷口が俺のあだ名を呼ばない。

胸の奥で、俺の気持ちを共感してくれるやつはこの世界にいない
思っていたが、今ので確認できた。

自然と俺は肩を落としてしまう。

「で、あんたは何でこんなことしようと思ったわけ？」

「はあ、俺らのボス朝比奈さんが帰ってこないからもしかしたら誘拐されたかもって思ってたよ」

「朝比奈さんが！？」

なるほど、谷口はアベレージだったのか。

「ふーん、キヨンがその人を誘拐したと」

「そうだよ、最後に朝比奈さんが姿を消したのはお前に会いに行きた日だからな」

俺と別れたあとに何かあったんだろう。

探した方がいいかもしれないが、今の俺じゃ何にもできない。

「だったら村の近辺はアタシが探すわ、谷口だっけ？　ここに俺たのボスはいないから帰って」

「は？　ええええええ！？」

谷口を窓の外に放り出したハルヒ。

「一人で探すつもりか？　さすがに危ないだろ」

「それに問題でもある？」

ハルヒが白衣を脱ぐと、俺は口が閉じなくなかった。

白衣で隠れていた黒いセーターに強調された豊満な胸。短い灰色のスカートと細い脚の肌を隠す黒いタイツ。

なんとも触れてみたい気持ちになる。

駄目だ、変な妄想が勝手に流れてくるぞ。

「隣に別の病室あるからそこに移った方がいいわね」

俺の下心満載な妄想を知る由も無いハルヒは杖を差し出す。

ベッドから立ち上がると補助をするように俺の横につくハルヒ。

「……」

俺が緊張しているのに気付いていないハルヒは、

「最近怪我人も少なくて入院する患者もいないから全然使っていないよ、特にこの部屋」

隣の病室を開けて蛍光灯の明かりを照らすスイッチを押す。

「気にすることないだろ関係ない俺を助けてくれたんだ。文句なん

てない」

「あ、そう」

ベッドに座り俺が一息つくと、ハルヒは前で腕を組みながら笑顔になる。

「？」

何かおかしかったのだろうか。

「じゃあ、ちよつと外を見てくるから寝てて」

「だからハルヒ危ないって、うお！」

急に体を押された俺はそのままベッドに倒れてしまう。

「あいたっ」

撃たれた部位全てに電撃のような痛みがはしり、俺は思わず口から素直な感想が漏れる。

目を閉じてこの痛みに耐えようと集中させるが、その命令は聞いてくれないようだ。

「あんたに言われたくない。怪我人に心配されちゃ意味ないのよ」

ハルヒの声がかなり近くで聞こえる。

いい香りが漂う。柔らかな感触が俺の胸元に付く。

目を開けると、

「えっ！？」

大きな瞳が微笑んだまま俺を捉えていた。

「とにかく、ここで休んでて」

呟かれると顔に吐息がかかる。その吐息に俺は自然と頬を熱くさせ、全身の体温が上昇していく。

麻酔にやられたような気分だ。

ハルヒの体が離れていくと熱が冷めていった。

いやあ、もうちよつと密着した状態でも俺はいいんだが。

「……あれ」

ハルヒはもう出掛けたようだ。

一人で勝手に興奮していたことが急に恥ずかしくなる。盛り上がった一部に俺は深いため息を吐く。

あいつはハルヒだ。かの有名な涼宮ハルヒなんだ。
なのになんで俺は興奮している？

ただ中身が違っただけでこうも変わるとは……。

「何やってんだよ俺は」

それから一時間は経っただろうが、俺は眠れずあのハルヒが心配
になってきた。

村の周りならあまり時間はかからないはずだ、なのにまだ帰って
こない。

「……」

いつの間にか手に取った杖、俺はベッドから起き上がる。

さっきまで横にいたハルヒがいない為か少し不安定だ。

少しふらつきながらも診療所から抜け出してみると、やっぱりハ
ルヒの姿は見えない。

村の出入り口には門があり、その近くにはなんとも深そうな森が
ある。

それ以外は特に目立ったものはなく見渡しのいい場所だ。
だとすればこの森しかないだろう。

入ってみると足場は悪くない、深緑の木々から差し込む太陽の光
が自然を輝かす。

空気もいいし深呼吸しても全く問題ない。

そんな自然に見惚れていると前からリズムの速い軽快な足音が聞
こえてくる。

「！ キヨン？」

「よかった、無事だった」

ん？ 今俺は安心したのか。

こいつはハルヒだ。何があっても大丈夫なんだ。

確かに心配はしたが絶対大丈夫だという自信があった。

「村の外に出るなんて一体何を考えているの？」

どうやら怒っている様だ。

「そりゃあ、心配だったんだよ」

「……ここには誰もいなかったわ、さつさと帰るわよ」

そう言いながらも俺の横につくハルヒ。

そろそろこの状態にも慣れてきた。

ハルヒが隣にいるという当たり前の光景だ。

そう、当たり前前の……。

「？ 誰がいる」

ハルヒが俺の腕を握り締めて動きを止めてくる。

「どこにだ！？」

まさかSOS団なのか？ 国木田のやつ、まだ諦めてないのかよ。

「動くな」

「！？」

俺達の前に現れたのはキツネのお面で顔を隠す見知らぬ人物。

長門に似ているが、何か雰囲気が違う。

「偽者を殺せとの命令。涼宮ハルヒの偽者を排除する」

「涼宮ハルヒ？ 誰よそれ」

殺そうと構えている相手に余裕の表情で聞くハルヒ。

「答える必要はない。来い」

左手を空に向かって伸ばしたと思えば俺達を囲むように現れたキ

ツネのお面をつけた集団。

「おいおい、冗談じゃないぞ」

まだ怪我也治っていないのに、死ぬ思いをまたしなくちゃいけないのか。

「その男は殺すな」

今度は左手を前に突き出す。

「キヨン、あんた何者？」

「それはあとで説明するから逃げるぞ。これはさすがにやばい」

「……やれ」

くそ、一斉に襲い掛かってきたぞ。

「やめろー！」

杖で払おうとしてもこいつらの動きが速すぎて回避されてしまう。

「……」

一人のキツネ面が俺のすぐ前に現れた。

「ぐう！……！」

相手の肘が見事に俺の腹部へと入り込む。

なんという力だ。体が浮いたと思えば近くの木まで吹き飛ばされてしまった。

「げぼげぼ、おえっ！」

涙目になるくらいの吐き気と痺れるような痛みには動けない。

「キヨン……！」

ハルヒへと視線を向けるとどうやら刺されてはいないようだ。むしろハルヒが謎の集団を蹴散らしているようにも見えた。

武器を奪っては、相手の肩や膝に突き刺している。

医者の助手にしては遠慮のないやつだ。

ハルヒは基本足を使って相手を崩し、そのまま地面に叩き落したり投げたりとなにやら武術を心得ているのだろうか。

「予想以上に手強い……退散しろ」

指令を出していたキツネ面の一人は左手を握り締める。

すると、刺された部位から武器を抜き取るという異常な行動。

「なっ！？」

「あんた達失血するわよ」

ハルヒの注意に反応せず去っていった集団。

あつという間に騒然としていた空気は消えていき、静けさが元通りになる。

「キヨン、平気？」

「ああ、なんとか」

しゃがみ込んで俺の腹部に触れ、痛みと外傷の有無を確認する。

「ホントに大丈夫そう、はあよかった」

「えっと、心配してくれるのか？」

「それは……当然じゃない。怪我人なんだから」

そうかい、初めて彼女が赤面する姿を見た。

俺が笑みを浮かべてそんなハルヒを眺めていると、彼女はそれ以上笑顔で俺を立ち上がらせる。

「さあ、今度こそさっさと行くわよ」

「へいへい」

またそう言いながら、俺の歩幅に合わせて横についてくれる。

ハルヒのようでハルヒじゃない。

偽者……か。この世界は涼宮ハルヒが創ったのだから全てがきつと偽者なんだろう。

元の世界に戻るとき彼女は、この世界のハルヒは消えるのだろうか？

だったら、これ以上彼女と干渉しないようにしなければいけない。簡単じゃないな、この世界もハルヒも全て……。

第十一話（後書き）

かなり遅くなりましたが読んで頂ければ幸いです。

第十二話

「キョン、だいぶ調子いいみたいね」

この世界に来てもう一ヶ月ぐらいだろうか、俺（周りからはキョンと呼ばれている）はこの世界に存在するハルヒと外を散歩している。

やれやれ今回はやけに長いじゃないか、前みたいに場が変わることもない。

本当のハルヒが近くににいるのに大きな怪我で会うことさえ、捕まえることさえできない。

掴んでも彼女は逃げていく、古泉が、国木田がいる限り。

あいつらをなんとか説得しないと駄目なのかもしれないな。

「杖なしでも歩けるし、でも前みたいに変なのに襲われたら大変だから折りたたみの杖とか必要ね」

俺の手を掴むハルヒ。

「街に戻るなら先生にまた送ってもらえるよう頼むわよ」

「いや、まずは朝比奈さんを探さないとな」

ハルヒは首を傾げる。

何故その必要があるの？ とでも言いたげな表情。

「仲間は多いほうが良いだろ？ 俺一人で行っても死んだら意味無いからな」

「そう」

「！」

突然指を絡ませてきたハルヒ。

照れている様子はない、当然のように絡む指へと俺は目線を動かした。

「……」

近づいたら駄目だ、これ以上は駄目なんだ。

不安になるだろうが、逆に。

「なあハルヒ」

「何よ？」

「命、あのキツネ面集団に狙われてるんだから、村が危ないんじゃないのか？」

「アタシを殺す理由が見当たらない、勘違いよ」

なんと前向きな発言。是非とも見習いたい。

しかしキツネのお面を被った集団は長門と格好は似ている。

同じ集団の仲間なら長門はどういうつもりだ？

あいつだけは単独で行動しているし、俺の周りで起きることを全て予知してはそこに導く。

考えてみると、今までの行動は涼宮ハルヒと会えるから長門の言うことを信じてきたつもりだ。

そうすればするほど、確かに会ってはいるがその度距離は遠くなる。

酒場に行っても、拷問に耐えても、国木田に殺されそうになっても、結局は彼女と離れていく。

それが目的だとしたら、長門は……。

「キヨン？」

腕を引っ張られ俺は意識をはっとさせる。

「考え事してる暇があったらさ、今の状態をもっと良くするのに専念したほうがいいんじゃない？」

ここしばらく、同じようなことを言われているような気がする。

「そうだよな」

「そうよ、そうすれば探している人、すぐに見つかるかもよ」

「だよな」

「そうそう」

一応彼女には今までの経緯を説明したつもりだ。

涼宮ハルヒのことも伝えたが、ただそっくりさんという認識しかないだろう。

「さあ、散歩は終わりにして診療所に戻るわよ」

「へいへい」

もう横につくことをしなくなったが、俺より少し後ろで見守る形
でいる。

治ればハルヒともっと距離を置けるはずだ。

診療所に戻ると、入り口で医者が待っていた。

「ハルヒ、怪我人が運ばれたんだよ、手伝ってくれないか？」

「当然、手伝うわ」

怪我人が運ばれた割にはやけにのんびりした感じた。

「……」

病室に入れば、俺は黙り込む。一息つきたいというのに……。

「長門、今度は何をしにきた？」

キツネのお面で顔を隠す長門。

ローブに身を包んで容姿がわからないが、この雰囲気は確かに長
門だ。

「朝比奈みくるの居場所を教える」

「……」

「朝比奈みくるは今我々組織が預かっている。貴方一人で森に来て
そうすれば返す」

「……で、あのハルヒを殺すつもりか？」

「偽者は排除しなければ貴方にも世界にも悪影響を及ぼす」

「どういう影響が出るんだよ」

俺はベッドに腰をおろしながらも長門を視界から離さない。

「困るから」

「は？」

「……」

長門は霧のように消えていった。

「おい、長門！」

もっとわかりやすく言ってくれよ。

「困るからって、なんだよ」

俺はベッドに背中を密着させる。

こつちが困るんだよ、そういう理解できない答えなんて望んでない。

全てを明白にしてくれ、そして元の世界に帰る。

「……」

朝比奈さんを助けるには一人で行かなくちゃいけない。

そうすれば引き換えにハルヒを殺しに来る。

一緒に行けば朝比奈さんが殺されるのだろう。

偽者を見殺しにして朝比奈さんを助けるのが賢明なのか？

そんなわけではない。

「キヨン」

「？ どうぞ」

また考えていると、ドアを叩く音にハルヒの声が聞こえてきた。

「キヨン、部屋の明かりくらいつけたら？」

「ああ、忘れてたな」

天井の蛍光灯が一瞬にして白く点灯する。

慣れない光に俺は思わず目をきつく閉じた。

「そうやって寝転んでたらそうなるわよ」

楽しそうな声、俺は半目で横を向く。

「朝比奈さんの居場所がわかった」

「あんたは寝てたら全部わかったの？」

「ま、そんなところだ。しかも俺一人で行かなきゃならない。その間に……もし」

腕を前で組む勇ましい態度のハルヒ。

細めた目に映る穏やかな表情は余裕にも見えた。

怪我人に心配されたら意味が無い、か。

「朝比奈さんを助けたらすぐにアベレージに協力を求めて、あいつらをなんとかしないと」

俺の言葉に満面の笑顔で、

「そうと決まれば即出発、あんたの命は狙われてないから大丈夫でしょ」

「ああ」

ハルヒに背中を押されながら、診療所の外へ。

村の出入り口で見送るハルヒは俺のように名残惜しさもない。そうやって割り切れるその性格。羨ましい限りだ。

「ありがとうな、色々手伝ってくれて」

「怪我人だもの入院している間は当然できることはする、でも今度は患者として来ないでね」

またねと、言う彼女に俺は笑ってしまう。

軽く握手を交わすつもりだったが、ハルヒの手が強く握りしめている。

必ず再会できるようにそんな思いが感じられた。

「じゃあな」

「じゃあね」

背を向けて森へと足を進める。

杖なしで歩けるようになったし、走ることもできる。

俺は振り返ることなく森へと歩く。

相変わらず緑が生い茂る自然の森は空気もいいし体が軽くなるな。

「……」

足場も悪くない平坦な道のり。

決してここを通行するような人はいないが、人が通れるように道が広がっている。

人工的な物はない、草木だって手入れなどされていない。

分かれ道もない一本の通路をただ信じて進むと、

「！」

キツネのお面で顔を隠している長門の姿。

その隣には体を震わして長門にくっつく可愛らしい朝比奈さんがいた。

「約束通り、朝比奈みくるは解放する」

「ひゃあ！」

長門に背中を押されこちらに駆け足でやってきた朝比奈さん。

「キョンくん」

泣きそうな表情で俺の後ろに隠れる。
どうやら無事だったようだ。

「……」

「こら、長門!!」

また、霧のように消えてしまった長門。

「くそ、なんだよあいつは……」

まだ詳しいことも聞いていない。目的も、涼宮ハルヒの行動も全部。

「……キョンくん、ありがとうございます」

「いや、俺は何もしてないですから、それより大丈夫でしたか?」

「はい、長門さん達はなんだか忙しそうでしたので」

長門は何か急ぐようなことをしているのだろうか。

「朝比奈さん、早速なんですけどアベレージに案内してもらえますか?」

「あ、はいこの森を抜けますので村とは反対側になりますけど……」
街から遠ざかりますけどいいですかと付け足される。

今は構わない、それよりも俺にも仲間が必要だ。

「行きましょう、ハルヒを探すのに協力をしてほしいんです」

「……わかりました」

さらに森の奥へと二人で進み始めると、俺は振り返りそうになった。

「……」

近づいたら駄目だ。想いも通わせても駄目だ。

俺は体を前に無理にでも進ませた。

今度こそ、涼宮ハルヒを掴んでやる。

長門の思い通りにもさせない、古泉の思惑通りにもな。

絶対、皆で元の世界に戻るんだよ……。

第十二話（後書き）

よろしくお願いします。

第十三話

「？」

そんなに激しくない坂道を下ろうと俺（周りからはキヨンと呼ばれている）はふと、ズボンのポケットに何か違和感を覚えた。

今まで歩くことに必死だった為か気付くことがなかったのだ。

ポケットに手を伸ばすと入れた記憶のない棒。

しかも、これは折り畳み用の杖じゃないか。

こんなものに気付かなかった俺はどうかしているぞ。

「あれ、杖なんて持って怪我でもしたんですか？」

俺に何があったのか知らない朝比奈さんの首を傾げた表情。

「ちよつと国木田と喧嘩してて、それはもう色々とありましてね」

俺にとつて癒しの時間だ。

どこにいたって変わらない朝比奈さんに安堵した。

「しかし、まあいつの間にかこんなものを入れたのやら」

彼女は随分手の早い、それでもありがとうな……ハルヒ。

「アベレージには谷口もいるらしいですね」

「はい、あの人は本物ですよ。わたしと一緒に召喚されたみたいですよ」

「はあ、召喚……？」

なんかファンタジー的な単語が飛び出してきたぞ。

「あれ、キヨンくんは知りませんか？ わたし達は涼宮さんが直接

望んで呼ばれたのではなく別の人によって召喚されてたんですよ」

俺が知らないことを少し自慢げに話す朝比奈さん。どんな表情も美しいですよ。

「それじゃあ、誰が俺達をしょ、召喚したんですかね」

どんな状況でもなんとも迷惑な話だ。

涼宮ハルヒが呼んだわけでもないのなら、どういう目的で巻き込むつもりだ。

「……長門さんかもしれません」

朝比奈さんの呟く声。あまり詳しくは言いたくないのだろうか、俯かせていた。

「とりあえず街に行きましょう。そこで話はいくらでも聞きます」
折り畳み用の杖を伸ばして先を地面に密着させる。

少々の坂道なら痛みもそれほどない。

実際完治したわけでもないのだから、彼女も薄々俺の考えていることを理解してくれていたのかもしれない。

近寄ってはいけない関係というもの。

完治するまであそこにいたら、俺と彼女の関係はずっと深く進んでいったのか、なんて考えも思い浮かぶ。

坂道を降りて平らな道を進んでいくと、どんどん林がなくなっていくのを確認できた。

完全に森が消えると朝比奈さんは真っ直ぐに指した。

人差し指の先より向こうと見てみると、確かに街がある。

最初にいた街とは違ってとくに天候が偏っている様子はない。

晴れ晴れとして歩いていている住民もまあ穏やかに過ごしている。

「ボス！」

ああ、どこかで聞いたことのある声だ。

「谷口」

迷彩服を着た谷口の姿は格好としてはきつと良いだろうが、あんまりにも弱腰だからなあ。

「お前は、あのときの……！」

「え、ええ！？ ここでは武器を出さないでください！」

谷口が取り出したナイフを慌てて体で隠そうとする朝比奈さん。

「す、すいません。とにかく、無事でよかったです！」

俺のことは無視して朝比奈さんに色々と話している。

お礼の言葉も無いとは、一応言って欲しいもんだ。

「ええとキョくん、ここの街はどうですか？」

「あっちの街と随分と違うんですね。警察官らしい人もいないし物

騒な人もいない」

「はい、この街は犯罪組織もアベレージしかいません、警察がいない代わりに民衆だけで設立した自警団があります。二つの組織が共同で街を守っているんです」

それはまた凄いのか、どうなのか俺にはわからん。

犯罪組織と自警団が協力しあっているんだから問題は少ないんだろうな。

「さて、地下にアジトがあるので案内します」

朝比奈さんの前を歩く谷口と最後尾を歩く俺。

この街に放浪者、それどころか貴族のような服装を着た住民もない。

皆が同じような洋服を着ているだけだ。区別がされている様子も無い。

街の路地裏に徘徊している奴を一切見かけないまま俺は地下へ続く道を進んでいた。

ここでも折り畳み用の杖は活躍してくれる。

鉄製のドアの向こうには、五人入れば一杯な地下室の真ん中には机があった。

しかし座る場所がないとは優しくないな。

そんな不満、朝比奈さんに言えないけど。

「キョンくん」

「はい」

「今までのことと、これからすることを教えてください」

俺は言われた通り、拷問されたことやハルヒがもう一人いてしかも長門率いる集団が彼女の命を狙っているということも全て話した。理解している朝比奈さんとは別に谷口やこの世界の住人は首を傾げて全く話に追いつけないようだ。

やれやれ、こいつらに詳しく説明している暇なんてない。

「まず古泉より先に国木田に接触したいんです」

「国木田くんと？」

「あいつは今負傷中でしょうし、古泉は最終的に殺すつもりだと思います。だから国木田を保護しないと全員が元の世界に戻れない」

「……わかりました」

落ち着いた優しい瞳が俺を捉えている。

その瞳と視線が合っただけで落ちそうだ。

「アベレージはSOS団を襲撃します。ボスである国木田のみ保護、なるべくなら死者を出さないようお願いします」

「はい!!」

谷口達は元気よく返事をしてはすぐに部屋から出て行った。

「キョンくん、よろしくお願いしますね」

「お願いします、朝比奈さん」

優しく微笑んでくれる朝比奈さん。

笑顔で返しているつもりだがどうも俺は自分の顔に力が入ってないと感じる。

疲れているのだろうか、これからどんどん忙しくなるというのに、地上には複数の貨物車が既に用意されていた。

「ほら、乗れよ」

「おう」

谷口に誘導されながら貨物車に乗り込む。

車内の後部座席には朝比奈さんが、俺は谷口に背中を押されそのまま朝比奈さんの隣へ。

「情報によるともう古泉くんはSOS団の下部組織全てを解体しているみたいです」

「早いな……街にはどれくらいで着きますか？」

「そうですね、猛スピードで車が走れば二時間で着くかも……」

それでも二時間か。ああ、なんだこの焦燥感は。

こんな世界なんて創るなよ。古泉だろうが長門だろうが、ハルビであつてもだ。

もうこれ以上俺を困らせるな。

「出発します」

運転手の声と同時にエンジンがかかり、動き始める。

揺れる車内で俺は頭を抱えてしまった。

痛みはない、だが重みが圧力をかけてくるのだ。

隣へと瞳を動かしてみると朝比奈さんは口を動かしている。

朝比奈さんはきつと俺に声をかけてくれているのだろう、しかし耳に入っていない。

国木田を保護し、最終的にハルヒと古泉を捕まえて真意を問い詰める。

長門ならきつと元の世界に戻してくれるはずだ。

「……」

「キョンくん？」

ようやく朝比奈さんの声が聞こえてきた。

瞼が重いな、眠たくなってきた。

次第に視界が狭まり俺は返事もできない。

「まだ着くまで時間がありますからね」

温かみのあるお言葉をいただいたのだから素直に休もう。

完全に視界を真っ暗闇状態にさせ、眠りにつくことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0802p/>

涼宮ハルヒのSOS団

2011年12月5日19時02分発行